

---

# **天使な悪魔**

ピヨスケ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

天使な悪魔

### 【著者名】

ピヨスケ

N2807F

### 【あらすじ】

転校した学校で博巳が出会ったのは誰もが羨むマドンナ。そんな彼女は天使様？それとも悪魔？今日も学園で繰り広げられるラブコメディ！

## 第一話

夜空が白々とその風景を変化させ、まだ朝靄の残る時。

山間の深くにあるその場所では、時折あがる声と床を踏み鳴らす音だけが響いていた。

建てられて数百年は経過している事が容易に想像出来るその屋敷は、古いながらも先人の知恵と

職人の腕の賜物なのだろう、傾き一つ無くその身を大地に根付かせている。

そして屋敷の敷地内にある離れ　　正確には何かの道場だろうか、

そこでは二人の男が拳を交わしていた。

「でえええいっ！」

「そりやつ」

先に動いたのはまだ幼さの残る少年だった。

男子にしては少し長いその頭髪を揺らし相手に突きを放つ。大きい瞳に長いまつ毛、小柄な体躯は少女と言われば見抜けない者が少なからずいる事だろう。

一方、その少年の拳を軽く受け流す人影はと言えば、年の頃は六十位だろうか、

薄くはなっていながら真っ白に染まっている。後ろで束ねた長い髪をなびかせるその姿はある種の威厳さえ感じさせる。

「てえいっ！」

「くつくつくつ、甘いのうつー。」

老人は少年の繰り出した右の正拳突きに対し、内側から外側へと交差させる様に右腕を絡め、そのまま

二の腕を掴み体を右足を後方に動かした上で、己の方向に引き寄せる。

「のわつー」

急激に体ごと前方へ引かれた少年は、すんでの所で右足を出しその体が前に倒れるのを防ぐつとする。

「ほーれ終わりじゃ」

その気の抜けた声とは裏腹な鋭い足払いを右足に受け、少年は前めりに倒れ込む。

ぎりぎりの所で左手を使い、前受け身をとった少年だがその背中に凶悪な重みがのしかかつて来た。

「げふつ」

「まだまだじやのう、博巳ひろみ」

かつつかつか、と高笑いしながら博巳の背中に座る老人。

その表情は、先ほどまでの鋭い眼光の面影は無く、どこにでもいて日曜の朝には河原でゲートボールでも

楽しんでいそうなものだった。

「……いいかげん、どいてくれないかな」

「まあ、そう言つな。可愛い孫とのスキンシップを計りとつとい、このじいさんの暖かい家族愛が分からんのか?」

「その孫を座布団代わりにしてるのはどこのどこですか」

博巳はそう愚痴ると軽く力を入れ起き上がる。

そうして一人は道場の中心に戻りお互に礼を交わした後、どちらともなく座る。

「さて……今日から新しい高校だのう。ビーチじゃ~上手くやつていけそうか?」

「まあ、なんとかやつていけると思つよ。小夜もいるのが心配事の一つだけど

「小夜か……あいつも腕は良いがお前に甘過ぎる部分があるしのう

……」

「部分つていうか全てが甘いんだけどね」

チチチ、と外から聞こえる雀の泣き声の中、一人は遠い田になる。

「まあ、お前がやつていけそななら何も文句はない。思う存分学業

に励めよ? なあに、心配事があつたらいつでも  
儂に言え。この神代総一郎の名にかけて、可愛い孫の為なら火の中

水の中、じゃ

「つよーかい

「さて……そろそろかのつ」

一通り話が終わつた二人は道場から母屋の食卓へと向かう。

「あ、おはよう父さん」

「うん、おはよう博巳」

「なんじや勝弥<sup>かみじや かみや</sup>、今日は朝から起きるのか?」

「ええ、仕事が一段落しましたしね。たまには家族と食事をしない  
と忘れられそうで」

「物書きなんぞになるからじゃ。己の選んだ道じゃろつが」

「ほりほり、勝弥さんもお父さんも。早くいただいちやいましょう  
?」

総一郎と勝弥の会話に割つて入つた女性 総一郎の娘であり博巳の母である神代夢<sup>かみじや め</sup>の一言で

総一郎と博巳は食卓に座る。

「おはよう父さん。母さんも」

「はい、おはよ」

「おはよづ、博巳。今日から新しい学校なんだから早く食べひやい  
なさい。それにその汗も落とさないと」

「はーい、いただきまーす」

こうして神代家の朝が始まり、食事を一通り終えた博巳は風呂場へ  
向かおうとする。登校までは十分すぎる時間がある為、意外とのん  
びりだ。

その時、母の夢が博巳に声をかける。

「あ、そっそ。お風呂に入る前に小夜を起<sup>ひ</sup>してきてね

「えー……朝から面倒くさいなあ……」

「文句言わない。早く起<sup>ひ</sup>してくね。今日から一緒に登校するんでしょ?」

「僕としては、むしろ置いていきたいんだけど……」

小さく呟きながらも博巳は、妹である小夜の部屋へと向かつ。

なんだつて転校初日から……などと思いながらドアをノックするが返事が無い。

もう一度ノックしても結果は同じだった為、仕方なく博巳は部屋に入る。

妹とはいえ、年頃の女の子の部屋に入るのは少しばかり躊躇われたが、このまま放つておけば一人とも遅刻なのだからそうも言つていられない。

「小夜、朝だぞー起きろー……って、熟睡じゃないか」

声をかけられた小夜だが起きる気配はまったく無い。それどころか布団を頭まで被り直す始末だ。

仕方なく小夜に近付きその体を揺らす博巳。まじりみの中から引き戻された小夜だったが寝ぼけながら田の前の兄を確認した後、そのまま両腕を廻してきた。

「お兄ちゃんだあ。お兄ちゃんお兄ちゃん、むふふふふう」「うげっ」「うげっ」

どうやら壊れかけている様子だった。

「やめなさいっ！というか早く起きて！」

「お兄ちゃんが起こしに来てくれたあ。むふふむふむふ、朝から小夜はどうぞタイムセールだようつ……」

なんですか、そのやばげなモーニングタイム。

とりあえず、寝ぼけているのか本気なのかは分からない小夜を引き剥がそうとする博巳だったが、小夜のかなりの力に抗えずにはいる。

そのまま小夜は自分の方へと博巳を引き寄せ

「ああ……久しぶりのお兄ちゃんの匂い……はふう」

「どこの変態さんだお前は」

自分の首筋辺りに顔を寄せ、くんかくんかと匂いを嗅いでいる妹の

頭をぺしりと叩きながら今度こそ引き剥がす博巳。朝から兄の汗で欲情する妹にかなりの危機感を持った博巳は、そのまま小夜の両田を指で無理矢理こじあける。

「ああっー！こんな強引なお兄ちゃんは初めてかもっー！田がものすつゞく渴めはじめてるけど小夜は、小夜はあつー。」

「つむれこ。とつと起きる、この変態シスターー！」

「あ、おはようつー！お兄ちゃんつー！」

完全に田が覚めたのかやたらと朗らかな笑顔で朝の挨拶をしてくる小夜。

しかし、心なしかその田はとろん、としている事に博巳はげんなりする。

「まつたく……少しは兄離れしてくれてるかと思つたけど昨日に引き続き

最悪だな、おい。」

「そんな困った顔のお兄ちゃんも素敵……」

「いじから早く支度しなよ。母さんが怒つてゐるぞ。」

「はあーーー！」

朝から一悶着あつた気がするが、といあえず無事にお役田を終えた博巳は改めて風呂へと向かい。

もちろん、背中越しに少しばかり病的な妹への一言も忘れずに。

「小夜、お風呂覗いたらもう口聞かないからねー。あと撮影も禁

止

「ぎくつ

「それじゃ行つてきます」

「はー、いつらつしゃー。小夜、遅れるわよー」

「分かつてゐよう……よしつと。じゃあ行こつかーお兄ちゃん！」

「……うん」

「今の間はっ？」

本当は一人がいいんだけど、と言いたい博巳だがそれを言つた瞬間、妹と登校出来るのが如何に素晴らしい事が、そしてどれだけの男がそうしたいと願つてゐるのかを小一時間は説教されるので口には出せない。

すでに昨日の夜に証明済みだ。そして拒否権は全く無いといつ事も。そして二人は学校までの道を歩く。

二人が目指すのは神代家がある山の麓にある高等学校。

名前を八代学園やつしろがくえんという、公立高校である。

普通科と進学科で構成され、割と規則の緩いこの学校にはこの街のほとんどの

子供が通つてゐる。その高校の一年へと博巳は編入する事になつたが、妹の小夜はずつとこの街で過ごして來た為、半年前に八代に入学していた。

高校までの道案内を小夜に任せてしまふが、問題は小夜の動きだつた。

自分の右腕に左腕を絡ませ、さながら恋人の様に寄り添つてゐるのは妹だが、色々な方向でまずい。倫理的にも。なんていうか、その、当たつている。こう一々むにゅつとした物が。

いつまでも小さい妹なのだと思っていたが、その体は女性的なものに変化しつつある。小振りとはいえ、そこはやはり女性なのだろう、女性とつき合つた事の無い博巳にはまるで免疫が無かつた。しかも小夜は口さえ開かなければ顔立ちの整つた女の子である。博巳は妹相手に少しでも邪な気持ちを持つた事により自己嫌悪の波に襲われる。

「あれ？お兄ちゃん、どうしたの？」

そんな博巳に追い討ちをかける様に小夜は博巳の顔を覗き込む。

「い、いやつ別につ」

焦りを隠せない博巳の様子に勘の良い小夜はきらーんと皿を光らせ  
る。

「まさか……小夜の体に欲情しちゃった?」「…」が気持ち良い  
の?」「

「だー! やめろってば! 欲情してなんかいいから!」

慌てる博巳をあざわらうかの様にぐりぐりと小夜は博巳の腕に胸を  
押し付ける。

あ、やつぱり軟らかいなあ、などと思つてしまつた自分にさらにも落  
ち込む博巳。

「違うから! 大体、小夜は妹だよ? 全然気にならないもんね」「

説得力ゼロの博巳に対し、今が勝機と悟つた小夜が言葉を放つ。

「えー……これでもちよつとは成長したんだよ? 母さん程じゃない  
けど、ブラのカップもワンサイズ上がつたし」

「え……そつなの……?」

つい答えてしまつた博巳は後悔する。こんな時に反応したら「小夜  
の胸が気になつてたんですね」と告白するような  
ものだからだ。もちろんその言葉を聞き逃さなかつた小夜は邪悪な  
笑みを浮かべる。

「やつた……! 遂にお兄ちゃんが小夜を女としてつ……! 毎日牛乳  
飲んで、毎晩バストアップのトレーニングした  
努力が遂につ……!」

まるで東大に合格したか、超一流企業の内定を貰つたかのような達  
成感のある表情を涙ながらに浮かべる小夜。

博巳は小夜の腕を振りほどき駆け足になる。

「ほらっ! 早く行かないと遅刻するよー転校初日から遅刻なんてま  
ずいんだから!」

「待つてよつー、もう一度触らせてあげるからあ

「もう一度も何も、自分から触つた事は無いつ!」

## 第一話

神代博巳。年齢十七歳。

古くから受け継がれている「滅魔」の総本山、神代家の現当主である神代総一郎の一人娘の夢と、その婿養子である神代勝弥との間に長男として生まれる。妹は神代小夜。

一般的には信じられない——いわゆる妖怪や幽霊の類いを祓う「滅魔」の力を隔世遺伝により強く受け継ぐも、

本人には至って自覚無し。力自体が潜在的な物として表には出て来ていない事も要因の一つと思われる。

妹の小夜は「滅魔」の力が既に表に出ており、低級なものであれば単独でも祓える様子。

中学は外部の中学に通い、そのまま同系列の高校に進学したが一週間前に総一郎の画策により、八代学園に編入。

本日より新しい学園生活に入る予定。

性格は至って温厚であり、自分から立っていくタイプではないが周りからの信頼は厚い。

その容姿と穂やかな口調、加えて誰にでも分け隔てなく接する事から、男女問わず人気がある様子。

好きな食べ物は母親が作る生姜焼きと和菓子。

好きな言葉は「なんとかなるさ」

好きな女性のタイプは——

「……好きな女性のタイプは長い髪で年上のお姉さんタイプ、かあ。

ビンゴね」

「はい。信用出来る筋からの情報ですので間違いないかと八代学園の教室の一つ。

朝の日差しが差し込んでいふといえ、やや薄暗いその部屋には一組の男女がいた。

最初に声を発した女が書類に一通り目を通した後、傍らにいる男に向かい笑みを浮かべる。

「藤堂、よく調べたわね。感謝するわ」

藤堂、と呼ばれた男はその顔に薄く微笑みを貼付け、軽く頭を下げる。

「しかし姫様、本当によろしいのですか？」

「なにが？何か文句でもあるの？私が一度決めた事は絶対に変えないのは、藤堂も知ってるでしょう？」

「それはそうですが……」

女はまだ何か言いたげな藤堂をひと睨みで黙らせる。その眼光には無条件で人を従わせられる程の力があった。

女は部屋の窓に向かい、そこから外の様子を眺める。

「いよいよ会えるのね……この宝龍久遠ほうりゅうきうとおん、あなたの名前を忘れた事は一度も無かつたわ……」

「それじゃあ神代君って、「あの」神代さんとの息子さんだったんだ」

「ええ、急に戻つてこいつて言われて、この学校に入つたんですけどね」

「でも編入試験つて大変だつたでしょ？うちの学園つて結構難しいつて言うし」

「なんとかギリギリつてこひですかね……普段から勉強しておいて助かりました」

あははー、と笑う女性教師——芝原初美しばはらはつみと会話しながら歩く博巳は、新しく入るクラスへと向かっている。

挨拶に向かつた職員室で、この初美が担任だと聞かされた時は「この学校おかしくないか?」と思つた

博巳だが、それもその筈。

同年代の男子の中ではけつして背の高くない博巳だが、この教師の身長は145センチ程。

最初はどこぞの中学生が紛れ込んだのでは、と思つたがその疑問はすぐに解決された。

なんというか、その、初美の胸部——つまりバストがかなりの物だつたのだ。

博巳の母親もなかなかの物を持つてゐるのだが、その身長と幼い顔立ちからは想像出来ない様な

立派な一つの膨らみに博巳は目をそらし、担任だと信じる事にした。だつて男の子だもの。

「到着つと。じゃあ神代君、ちょっと待つててね。呼んだら入つてくる様に」「はい、分かりました」

まだ騒がしい教室に入つて行く担任の背中を見つめ、少し緊張している自分に気づいた博巳は

掌に「人」という字を三回書いて飲み込む。いや、効くのかどうかは分からぬが。

すると教室が静かになり初美の声が聞こえてくる。出欠の確認をした後に簡単な連絡事項を伝える初美。

そして少し間を置いた後、ひとりわ大きい声を発する。

「みなさいん!今日は一大イベントがあります。なんと、このクラスに新しい友達が増えましたー!」

小学校か、ここは。

思わず突つ込みたくなつた博巳だが、自分が呼ばれる頃合いだと考え何とか踏みどまる。

「せんせー!そいつって男ー?女ー?」

「男の子だよね?初美ちゃん、その子つてかつこいい?」

「踏みとどまるーー。

「ぱっかだなー。」うううう時は女つて決まつてんだよ。そんで実は俺と知り合いだつたりするんだぜ」

「漫画の見過ぎ。きもい。しね

「結局どつちなんですかー？」

「踏みとどまるーー。

「ぬつふつふつふ。聞いて驚け、見てわめけ。そして……喜べ！男子ー！」

「踏みとどまるーー。

「そして……喜べ！女子ー！」

「踏みとどまるーー。

「それではっ！新しいクラスメイトの神代博巳ひやんでーっす！」「ちゃん付けで呼ぶなあつー！」

「踏みとどまれなかつた。

ぱしーん、とスライド式のドアを開け放ち初美に突っ込む。その音と声に、ざわついていたクラスが静まり返った所で博巳は自分がどれだけ目立つてしまつたかを理解する。

キヨトンとした顔の初美の近くまで行き、ペロリと頭を下げた後、勝手かとは思つたが自己紹介をする。

「えと……神代博巳です。宜しくお願ひします……」

直後ーー教室内は応援団も真つ青な音量で埋め尽くされた。

「かーわーーーーーー！」

「男子の制服だろ？あれ。何で女の子が着てるんだー？」「

「え？どゆこと？どゆことー？」

「なんだー、そういう事だつたのかー

「ねえねえ、ぎゅつしていい？いいかな？いいかな？」「

「はいはーい、みなせーん。おさわり禁止ですよー」

なんだ、このクラス。本当に大丈夫か。

「どうか僕は男だし、初対面でおさわりはされたくありません。そこから博巳が、クラスメイトに質問攻めにあつたのは言つまでもない。

「なあ、本当に男なのか？」

「まず間違いなく。戸籍もしつかり」

「付き合つてる男の子はいるの？」

「いません。といふか僕は至つてノ・マルです。そういう方向性が

お好きなら、ご期待には沿えません」

「ちょ、ちょっと、上田遣いで名前呼んでみてくれない？俺、浅野

つて言つんだ。あさのくうんつて」

「お金をもらつてもやりません。大体何度も言つてるけど僕は……おーとー」

「い、この服……き、着てもらえないかなあ？」

「ブルマ出すな」

周りの質問に一つ一つ丁寧に答える博巳だったが、なぜだろう？明らかに間違つた質問が多い。

一時間目がロングホームルームだつた事で、初美の提案により博巳への質問タイムが始まつたのだが

いい加減うんざりしていた博巳は大きくため息を吐く。

「あのね……もうちょっとまともな質問をしてもらえたると助かるんだけど」

「なにを言つか！みんな至つて真面目だぞ！」

先ほど浅野君と呼んでくれ、と言つていた生徒から大真面目な顔で返された。

その時、さすがにこの状況は収集がつかないと思ったのか、一人の女生徒が声をあげた。

「その位にしといたら？ 神代君もいきなりこんな囮まれたら、あいつ皆の事が嫌いになるわよ？」

「そりそり。おさわりは程々にねー」

「先生は黙つてて下さいっ！」

「ふええん。吉川さんに怒られたああっ」

吉川よしかわという生徒に叱責され本氣で泣く教師、芝原初美29歳。

吉川の言葉を受け、さすがにやりすぎたとでも思ったのか、囮んでいた生徒達も少し落ち着きを取り戻した様だ。

「あ、ありがとう……えと、吉川さん？」

「吉川智美よしかわともみよ、宜しくね。一応このクラスの学級委員長やつてるわ

「そなんだ……尊敬します」

「そう思うのも無理はないわね。さすがにあの状態になつたら

「でも本当に助かりました。有り難うっ」

くすりと軽く笑う吉川に対し、博巳も笑顔を返す。

「え、あ、いや、別に、い、委員長として見過こせなかつただけで、そ、そういう事だから」

「？」

何やら顔を赤く染めた吉川は先ほどまでの雰囲気を一変させ、急にしどろもどろになる。

もちろん何故そうなつたのかを博巳は理解していない。これが博巳なのだ。

「おい、見たか今。すげえよ」

「あれは破壊力抜群ね……」

「俺、吉川のあんな顔見た事ねえよ」

「こ、この服……き、着てもらえないかなあ？」

博巳と吉川のやり取りを見ていた生徒はレアな光景に感嘆の言葉を漏らす。

約一名を除いて。あとブルマ出すな。

「ほんっ……それじゃあ、何か分からぬ事があつたら相談して。

皆も神代君をいじめない様に

「うん、有り難う」

二人が言葉を交わした後にチャイムが鳴り、一時間目の終わりを告げる。

なんだかんだあつたが、悪い人達ではなさそつだ。皆と仲良くやつていけそうだな、と博巳は思うと

次の授業を受ける準備を始めるのであった。

「つ……疲れた……」

午前の授業が終わる事を告げるチャイムが鳴った後、だらしなく机の上で伸びている博巳。

智美のおかげで混乱は収まつたものの、休み時間になると必ず皆がひつきりなしに質問を浴びせてきたのだ。

中には質問と呼べないものもあり、博巳は何回「ブルマ出すな」と言つたか分からぬ。

あいつ一歩間違うと犯罪者になるんじゃないか。

などと考えていた博巳の後ろの席に座つていた浅野から声がかけられる。

「おつかれい。大変だつたな」

「その大変の半分は浅野君の煽りのせいだつた氣もあるんだけどね」「あつはははは、小さい事は気にするな」

この浅野といつ男、休み時間の度に博巳に対し「もじもじしてみてくれ」だとか「下の名前を可愛らしく

呼んでくれ」などといつリクエストをしていたのだった。周囲も博巳のリアクションを見てみたいが為に変に同調するのでたちが悪い。

こいつも犯罪予備軍じゃないだろうかと疑つてしまつのも無理は無かつた。

「んで？ 博巳ちゃんは弁当？ 学食？」

「ちやん付けはやめてつて言つてるでしょうが」

「良いじやんかよー。んで？ 弁当だつたら一緒に食おうぜー」

「はあ……もう空しくなつてきた……じゃあ一緒にーーー」

「博巳せんぱーーーあなたの愛するラブリー小夜ちゃんが、恋のスパークエクスプレスに乗つて

只今參上つゝ一・ヒルヒー・」

下  
げ

博巳が浅野に言葉を言い終わるかどうかという所で、教室の前の扉が豪快に開け放たれた。

もちろんクラスの皆は突然の出来事に口をぽかん、としている。

すみません！このクラスに今田編入してきた神代博巳先輩ですかあ？彼と一緒に弁当

何が楽しいのか知らないが、弁当箱らしき物を片手に頬に手をあて、  
ぐねぐねしている小夜は  
意未不明な言葉を連発して……。

後日、音速を超えていたかも知れないとクラスメイトに詮議される  
素早さで小夜に向かう博巳。

「とてもなく意味が分からぬよ、小夜ちゃん？ ます、小夜と僕は間違いなく血の繋がつた兄妹であつて、

つ？何かなあつ！？」

「あだだだだだだだだだだ。せんぱ……お兄ちゃんのその容赦ない攻撃に、小夜の鼓動は高ぶつて仕方無いの。

といいかこのめかみに指が食い込んでしゃあ指しやなし爪が爪があ  
ぎりぎり、と音が聞こえてきそうなアイアンクローを受けているに  
も関わらず、頬が赤く染まっているのは

痛みのせいなのか、それとも他の感情なのか。博巳は後者では無い事を祈る。

「それで? 何しに来たんだよ」

「あー気持ちよか……痛かった。何しつつて、もひるんお兄ちゃん  
とい飯を食べよつと思つて。

そんな訳でしつつれこしまふざきよ

「とりあえず落ち着こいよ」

「ひ……人に足を引っかけておいて何も悪びれないお兄ちゃんが小夜は大好きです……」

教室に侵入しようとした小夜に足を引っかける、とこうより足払いに近い攻撃を加え転倒させる博巳。

「はあ……とりあえず皆さん、お騒がせしました。あと、こいつは妹の小夜ですが、変な関係とかはないのでご心配なく」

その博巳の発言によりこちらを奇異の目で見ていたクラスメイトは元通りに昼食を再開する。

一部から「なんだー」だの「つまんない」だの聞こえてきたのは無視しよ、と博巳は決意する。

「まあまあ、良いじやんよ。一緒にじ飯食べようぜ」

ちなみにこの発言は浅野である。いつの間にか博巳達の横にきていた彼は弁当箱をちらつかせながら

のほほん、と博巳の返答を待っている様だ。

「しょうがない……今日は我慢しよう……ほら、小夜。皆で食べよう

う

「そりそり。皆で食べれば美味しいよん。しかも一年の中でも美人と評判の子と昼食がとれるならこんなに嬉しい事は無いわな」

そう言って小夜を立たせようと手を差し出す浅野。

「何ですかこの手は。せっかくお兄ちゃんに起こしてもうおうと思つたのに小夜の計画が台無しです」

「は……はい……すいませんでした……」

どんな計画だ、と浅野は突つ込みたかったが尋常ではない小夜の気迫に気圧される。

「小夜。そんな事言つなら一度と一緒にじ飯は食べないぞ」

「いやあん。お・に・い・や・ま。小夜のちょっとした冗談です！」

あつ、すみませんでした、そちらの……ええと

「浅野光」。宜しくね。小夜ちゃん

「はい、浅野さん。手を貸してくださつてありがとうござります…

くそがあ……」

最後の部分は決して一人に聞こえない様に小声で呟く小夜。やはりこの娘は心のどこかに闇を飼つてるのかもしれない。

「えと……そんじゃあ二人とも。今田は俺が昼食タイムにおすすめのとつておきな場所を教えてあげよー」

「じゃあ行こうぜい！」

「えつと、意味が分からんんですけど？ 私はお兄ちゃんと一緒に昼食を食べ、その後は膝枕なんかをしてあげて「柔らかいなあ、小夜の膝枕は」「うふふつ、くすぐつたいよお兄ちゃん。あつ、そんな所に手を」みたいな展開を期待してるんです。あなたはお呼びじやありません」

「小夜」

「うつわあ、楽しみです！ 浅野さん、そのベストプレイスとやらはどこにあるんですかあつ？」

またも黒いんだかピンクなんだか分からぬ発言をした小夜を一文字で嗜める博巳。

「あ…………あ…………とりあえず付いてくれよ」

「ふつ…………じゃあ行こうか、浅野君。というかこれから『飯なのに凄い胃が痛くなつてきた……』

そして教室を出て行く三人。もちろん他のクラスメイトは遠慮という名前の回避行動を取っていたが。

「えーっと……僕の予想と脳内が正常なら、『』は屋上に出る扉の

前で更に浅野君はピッキングと呼ばれる

行為を行つてゐる氣がするんだけど」

「おかたいなあ博巳ちゃんは。大丈夫だつてば。いつものひやつて  
るんだから……と」

浅野の発言はカシャン、といふ音を立て鍵が開くのとほぼ同時だつた。

階段を登られ、そろそろ上の階は無いはずなのでは、と感じてい  
た博巳の問いかけにも浅野は動じず、

小夜も不満な顔ながら若干わくわくした表情を見せてゐる。

「そりだよお兄ちゃん。高校生は屋上でご飯を食べる事の一つや二  
つは経験しないともつたいないんだから」

「小夜。その発言は絶対正しくない」

またも意味不明な持論に辟易する博巳を置いて、浅野と小夜は屋上  
の扉を開ける。

普段から鍵がかかっているのを見た所、他に人はいない事は容易に  
想像出来る——筈だつた。

「あら？ 浅野……君だつたかしら？」

誰もいない筈の屋上で一人昼食をとつてゐる生徒がいた。

「あ……あれ？ 宝龍先輩じゃないつすか？ どうして——」

「それはあなた達も同じぢやない？」

「まあ、確かにそうつすけど……でもまさか宝龍先輩みたいな人が

一人で、しかも屋上で食べてゐると思わなくて

「別に友達がいない訳ぢやないのよ。ただ、たまに一人になりたい  
時もあるわ」

「そつすか……つと、ああこの人は三年の宝龍久遠先輩だ。どう  
だ、すげえ美人だろ」

「やめなさいつてば。確かに見られない顔ぢやないとは思つけど、  
世の中には私より綺麗な人はいくらでもいるわ」

苦笑しながら謙遜する仕草も絵になつてゐるような美人だった。

決して染料などでは無い天然の茶色の髪を少し伸ばし、謙遜の言葉

を放つた口元は少し厚めの唇につつすらと

紅を挿した様な桃色だった。

口元はやや吊り気味だったが、大きめの瞳に長く整つたまつげを備えている。

一言で言えば美人。ただ、有無を言わせない美しさがある様に博巳は感じた。

都内の中学そして高校に通つていた博巳だったので、それなりに綺麗な女子を見た事はあつたが、宝龍久遠という

女生徒からは全く別次元のオーラの様なものが出ていた。

そして浅野の後ろにいた博巳達に視線を向け、一瞬目を見開いたーと感じたのは博巳だけだつたろうか。

驚いた様な、それでいてどこか懐かしむ様な視線を向けられた博巳だつたが、軽く袖を引っ張られる。

もちろん引っ張つたのは横に立つ小夜だ。その横顔には先ほどまでのふざけた表情ではなく、眉間に軽く皺を寄せ、

何か嫌な物を見てしまつた、という表情を貼付けていた。

「行こう、お兄ちゃん」

小夜の口から出たその言葉の真意が分からず博巳は訝しげな視線を小夜に送る。それは振り向いた浅野も

同じだつた様だ。

「どうしたの?どこか具合でも悪い?」

「いいから行こうつてば。ここはーーあの人は何か嫌だ」

「ちよつ……小夜、失礼な事言つなつてば」

「そ、そうだよ小夜ちゃん。滅多な事言つもんじやないよ?」

博巳の問いかけに答えた小夜の言葉は博巳も、そして浅野も予想しなかつた答え。

その言葉に一人は慌てて小夜に声をかけるが、小夜は黙つたまま博巳の袖を引く力を強めるだけだ。

その様子を見つめていた宝龍は、食べ終わった弁当箱を片付け立ち上がると博巳達の方へと歩を進め、

「お邪魔になる様だつたら悪いから行くわ。もう食べ終わつたし」と言い残し博巳達の背後にある扉から出ようとする。

「あ、あのっ！すみません。妹が失礼な事を……えっと、今日一年に編入してきた神代博巳です。

ほんとすみませんでした」

慌てた博巳が挨拶すると宝龍は博巳を見つめ、軽く笑つた後で博巳の方に手をかけ耳元で囁く。

「いいのよーーーくん

「えつ？」

美人の顔が近かつた事で更に動搖したのか、耳元で囁かれた言葉の後半が聞き取れない博巳。

ぼうつとした博巳にもう一度微笑み、扉から出て行く宝龍。その後ろ姿を博巳はただ見送るしかなかつた。

「いや、しかし相変わらず美人だつたな」「さつきの宝龍つて人？」

「博巳ちゃんもそう思うだろ？あんだけ綺麗で頭もいいんだぜ。あと親父さんがどつかのお偉いさんだつて」

「うわあ……人生勝つたも同然だね、それ」

浅野の話を聞いて素直に羨ましがる博巳。

三人は只今、昼食の真っ最中である。母の夢が作ってくれた弁当をつつきながら浅野の話に耳を傾ける。

「でも浅野君つて宝龍先輩に詳しいんだね？」

「まあな。というか、あの人人の事はこの学園の人間ならほとんどの知つてるぜ」

「へえ、それにしては個人的に名前も覚えられてたみたいだけど？」

「そりやお前、俺が去年告白したからじゃねえか？」

さらりと発言したが、今この場に宝龍がいない事でその告白は失敗したか今は付き合つていなかが分かる。

「しかも大衆の面前でルパンダイブしながら告白したからな。多分、印象が強かつたんだろ」

「へ……へえ……。浅野君の度胸は素直にすごいと思うよ……」

自分だつたらそんな馬鹿な真似は出来ない。大体ルパンダイブしながらつて何だそれ。

「それで？話を聞いてる限りじや当然告白は失敗したんでしょ？」

「おうよ。目標まであと60センチつて所でネリヨ・チャギ（かかと落とし）が炸裂してな。でもな……黒のレースを見ただけで俺は本望だつた」

「ねえ、やっぱ浅野君つて馬鹿なんだよね？」

告白が目的だったのかパンツが目的だったのか。ともかくこの男、そういうものへの執着心はすごいのかも

知らない。

そんな馬鹿な話を博巳と浅野がしている間、ずっと無言だった小夜が口を開いた。

「お兄ちゃん。さっきからずっと宝龍って人の話ばかりだよね？」

「どういう事？」

「どういう事、というのがそもそも意味不明だが小夜のその気迫に博巳は背中に悪寒を一筋走らせる。

「どういう事も何も……どうしたの？ 変だよ？」

「変じゃない。お兄ちゃんはああいう人がタイプなんだよね。年上でお姉さんで長い髪の人」

「おひつ？ 何だよ、博巳ちゃん。宝龍さんに惚れちゃったかあ？」

「惚れつ……！ 何言つてるんだよ。小夜も浅野君も変な事言わないの」

「でもなあ、やめとけやめとけ。宝龍先輩つてガードが固いからな。「不沈艦」とか「八代のテ・ダナン」とか

呼ばれてるんだぜ」

「どこの傭兵部隊の船ですか？ それ。

「だからやめといた方が無難だぜ？ 確かに博巳ちゃんは顔も悪くない……というか女の子みたいな顔だからな。

俺には小夜ちゃんとの方が恋人っぽく見えるよ」

「浅野さんもつと黙つてくださいまあもつとどんどん黙つてくださいこれ以上無いくらい畳み掛ける様に」

「さ……小夜……目が怖い……。あと浅野君も小夜の事を変に焚き付けないで」

「しつかし、小夜ちゃんつてとんでもないブランだな」

目の色を変え援護を要請する小夜を見て、やや呆れた様に浅野がため息をつく。

「そうなのです。私は身も心もお兄ちゃんに捧げたのです。といふか実妹では無いから染色体的にもオールオッケーです」

「え？ そうなの？」

「浅野君、本気にしないで。小夜とは正真正銘、血の繋がってるから」

「ああん、お兄ちゃんのその蔑む様な視線は小夜にとって何よりも  
代え難い宝物です……」

「こりや重傷だな」

「でしょ？」

こうして編入初日<sup>ジャンキー</sup>の博巳の昼休みは中毒者氣味な目をした小夜と、  
かかと落としをくらいながらもパンツを田に焼き付ける浅野に囲まれ、過ぎていくのだった。

「なんというか……今日一日で一年分の体力を使つた気がするよ」「そりやあれだけ囲まれたりしたらね。でも良かつたじやん、人気者になれてさ」

「あれは人気とは違う気が。なんかペツト的な扱いを受けてた様な……」

「ペツトになつたお兄ちゃんかあ……ぞくぞくするつ  
「やめなつてば」

博巳はスイッチの入りかけた小夜の額に軽く手刀を落とし黙らせた。放課後にも一波乱あるかと思っていたがそんな事は無く一人は現在、家までの帰り道を一人で歩いている。

山の中腹にある自宅までの道は多少整備されているとはいえ、街灯も少なく夕日の明かりだけが頼りである。

お祓い稼業の寺——博巳達の実家だが、その寺が中腹にある事も手伝い、昔からこの辺りにはあまり人が近寄る事はなかった。

博巳や小夜の友達も進んで遊びに来ようとは思わなかつた様で、二

人はいつも相手の家や麓の遊び場に集合していたものだ。

「でも私のクラスにも噂はまわってきてたよ? 一年にすぐじい可愛いい女の子が転校して来たらしいー、ってね」

「ぜ……全然嬉しくない……」

「まあまあ。きもーいとか、がっかりーとか言われるよりも良いじゃない。そんな可愛いお兄ちゃんを持つて

小夜は鼻高々なのです」

「そりやどうも。兄としての威厳は少しも無い様に感じるけどね」「でもお兄ちゃんを狙う様な奴がいたら、その時は小夜が思いつく限りの苦痛を与えてやるからつ。安心してね!」

小夜さん、それは犯罪行為です。どちらかといつと。しかも、何でそう明るい顔で言うかな。

猪突猛進で一方通行な小夜の言葉に博巳は頭の中で突っ込みを入れる。

「とりあえず初日の感想なぞはどうですか? お兄ちゃん」

「んー……まあ、色々あつたけど何とかうまくやっていけそうかな、と。クラスの皆もいい人ばかりだつたしね」

茶化す様に聞いてきた小夜に対し、今日一日の事を思い出しながら答える。

確かに行き過ぎた人間が多かつたのは事実だが、決して嫌な気持ちを持たれた訳ではないと博巳は思つ。

「そつかー。残念きわまりないけど、ここは妹として喜んでおくべきだよね」

「そゆ事」

そんな他愛も無い話が終わる所とする頃、一人は住み慣れた家に着く。

そして玄関に手をかけた時、中から何やら騒がしい声が聞こえて来た。

「あれ? お客様かな?」

「みたいだねー」

博巳と小夜は中に入り、帰宅を家族に知らせると奥から母親の夢が迎える。

「ああ、おかえりなさい。今お父さんにお客さんが来てるのよ。と  
いうか私たちのお客さんでもあるんだけじね。  
ちょうど良かつたわ、二人もご挨拶なさい」

そう言われ、博巳と小夜も夢と一緒に奥の客間へと向かう。  
「蓮君、一人とも帰つて来たわよ。博巳、小夜、こちらは宗谷蓮君。  
そうや  
れん

お父さんの元・教え子で私と  
勝弥さんの友達もあるの」

「どうも初めまして。神代博巳です」

「ほんにちわー。神代小夜でーす」

簡単な挨拶を済ませた博巳は蓮、と呼ばれた男に田を向ける。

年の頃は三十前半くらいだらうか、髪は色素を全て抜いた様に白く  
腰まで伸びていた。

やや細めの田の中にある瞳は金色に輝いており、日本人の名前である  
事が不思議なくらいの人物だった。

「やあ、博巳ちゃんに小夜ちゃん。随分大きくなつたねえ。お久し  
ぶり、かな?」

「へ?」

目の前の人物に会つた記憶が無い博巳は思わず間の抜けた声を出しつ  
てしまつ。

自分の記憶を掘り返してみてもこの蓮とこの男の事は博巳の頭の中  
には無いのだ。

「ええと……覚えてないかな?でも無理ないかな。博巳ちゃん達が  
まだ本当に小さくい時だったからねえ」

「すみません……つて事は小夜も?」

「うん、覚えてない」

博巳の問いかけに小夜は首を振る。というかこの妹は兄以外の男に  
興味なさげだ。

「そつかあ、ちょびつと期待してたけど忘れられてたのはやつぱりショックかな」

「だつて蓮君が前にここに来たのつて……確か博巳が三歳くらいの時なのよ？そりゃ忘れるつて」

「夢ちゃんも相変わらずだねえ。そういうえば勝弥君は？」

「今ね、お仕事が佳境みたいで。誰も部屋に入るなつて言われてるのよ」

「それじゃあ、何とか夢は叶えた訳だ。昔から文章を書く時は切羽詰まつた顔してたもんねえ」

昔を懐かしむ様に蓮と夢は会話を続ける。

博巳と小夜の二人はまだ制服だった事を思い出し、それぞれの部屋へと着替えに向かう。

もちろん変態街道を進み始めている妹に釘をさした上で。そして一人が客間に戻つてくる頃には既に蓮が玄関に向かい帰ろうとしている様子だった。

「それじゃあ、総一郎さんに夢ちゃん。博巳ちゃんに小夜ちゃんも。また遊びに来るからねえ」

「全く……久しぶりにこの家に来たんじや。一晩くらい泊まつていつても罰は当たらんじやろうに」

「それがそういう訳にもいかないんですよ。それに……これから準備がありますしねえ」

「そうじやつたな。儂も協力は惜しまんからな、夢も勝弥もそのつもりじゃ」

「ありがとうござります。それじゃあ、監さんまた会いましょうねえ」

そう言い残し帰つていいく蓮を家族で見送つた後、博巳は蓮の事を聞こうと総一郎や夢に問いかける。

「ねえ。あの入つて……人間？」

「えー？」

博巳の突然の質問に驚いたのは妹の小夜だった。今までこの総本山

の弟子で、夢や勝弥の友人と聞かされれば

普通は人間以外の何者でも無いと思つのだから無理は無い。

「ほう、博巳は分かつたか」

「いや、何となくなんだけど……」「いや、上手く説明出来ないや」

「それでも、完全に上辺を作つていたあやつの中身を感じる事を出来るとはな。さすが儂の孫、と言つた所かの」

「なによう、私は全然気づかなかつたのにー」

「かつかつかつ、小夜も腕は上げたが肝心な所はまだまだじやのう大きな声で笑う総一郎の言葉に小夜はますますむくれ始める。

「でもさあ、何で「向こう」の存在がおじいちゃんの弟子なんてやつてた訳？実際、共存してゐるつて言つてもわざわざ滅魔の修行なんて好き好んでやらないでしょ？だって、下手したら自分が危ないつてのに」

小夜の質問に目を細める総一郎。

「まあ、「向こう」の奴らの中にも変わり者がいる、といつ事ぢやよ。それにあやつは力の使い方を間違える様な奴でも無ければ立場的にも無理は出来んのじや」

「立場？」

「それについてはその内にな。夢、儂は腹が減つて仕方無いんじや。早く飯にしてくれ」

「はいはい、博巳と小夜もちょっと手伝つてくれる？」

まだ話に納得していない様だつたが夢について行く小夜と博巳の後ろ姿を見つめ、総一郎は呟く。

「……これで更に面白くなりやうじやのう……」

もちろん博巳と小夜にこの呟きが聞こえる事は無い、と知りながら。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2807f/>

---

天使な悪魔

2010年10月28日07時27分発行